講演会
「食べることは人類共通」を終えて

文化交流コース　本目 彩菜
国際日本学部　国際文化交流学科2年
中尾 千夏　長谷川 智紀　安達 澪　李 東浩

11月3日、各国の郷土料理を研究し、株式会社e-foodの代表として活躍されている青木ゆり子さんによる講演会が本学で行われた。青木さんはこれまでに世界約70か国の取材を重ねて調理法、食文化を学びつつ、料理写真の個展開催など各国料理のすばらしさを伝えるための幅広い活動を行っている。この講演会は、国際日本学部国際文化交流学科文化交流コースの「コース演習」という必修授業の中で、「みんなで選ぶ」講演会として企画されたものだ。

これは文化交流・多文化共生というテーマのもと、約60名の履修学生が小グループに分かれて講演会の企画を立てて、コンペ形式でプレゼンテーションをするという学生主体の企画である。私たちのチームは青木さんを講師とした講演会の企画を立てた後、コンペで15チームの中から一位に選出され、「食べることは人類共通」というタイトルで講演をしていただくことになった。

私たちは、今回の講演会についての最初の話し合いで、「学生全員が、楽しみつつ学べるトピックって何だろう」というところから様々な案を出していった。全員に馴染みがあり、なおかつ「文化交流」というテーマに合うとなるとなかなか難しく、長いこといい案が浮かばなかった。そのような時、グループのメンバー全員が共通で知っているもの、そして身近なものが見つかった。それが「食文化」だった。私たちは、地域によって様々な特徴がある食文化は、異文化を知る良い方法ではないかと考えた。

話し合いを進めていくうちに食を通じた文化交流は存在するのかという疑問が浮かんだ。国際化が進む現代において異文化交流を行い、相手と相互理解を深めるということは非常に重要である。そこで私たちは、異文化を持つ相手を理解する手段の一つとして食文化が有効であり、食というものには異なる文化を持つ相手と私たちを繋げてくれる可能性があるのではないかと考えた。また、食を通じて異文化交流するうえではそれぞれの文化、宗教が持つ規定などを考慮することが重要である一方で、それらに関する私たちの知識は一般教養程度であり、実際に食を通じた異文化交流の経験もない。そこで世界の食に詳しい青木さんにお話を伺う運びとなった。

青木さんは私たちに食を通じた文化交流をするうえで大切なことを数多く教えてくれた。まず、宗教と食文化の関係についてだ。イスラム教、ユダヤ教は豚肉を避け、ヒンドゥー教は肉食を避けるというように、世界には伝統宗教と生活が結びついている場合が多く、それぞれの食規定を重んじる必要性について学んだ。宗教以外にもベジタリアン、ビーガン、オーガニック食品しか摂取しない人々がいるなど、食規定は様々である。この他にも、動物福祉を考慮し、健康的な生活の中で飼育された動物しか食さない人々がいることを知った。

そして、青木さん自身の経験からニューヨークの食について学んだ。青木さんは学生の時に1か月ほどニューヨークを旅行し、そこでカルチャーショックを受けたという。最初に感じたカルチャーショックは多様な人々が暮らし、それぞれの地区に各国の人々のコミュニティが形成されていたことだそうだ。滞在中に食した各国料理の中でもニューヨークの中華料理は日本で食べるそれとは味が異なり興味深かったという。そして私たちは、郷土料理は郷土料理でもその料理が伝えられた地域がそれぞれ持つ特色が組み込まれてお

り、違いが出てくるということを学んだ。

講義の中では各国料理に関するクイズの時間も設けていただくことで、各地域の食の特徴、つながりについて知識を深めることができた。日本の伊勢うどんがベトナムの都市ホイアンのカウラウという料理とつながりがあるということは驚きであった。ベトナムの日本人町の町長が現地の人々に伊勢うどんを伝えたという説があるという。このクイズから、食文化というのはその食文化が生まれた地域だけで収まるものではなく、人々によって様々な地域に伝えられ広まり、場合によっては変化していくものであるということを学んだ。

青木さんは、人類はみなおいしいものが好きで、海外に行く際はその国の「おいしい」「ありがとう」という言葉を押さえておけば交流がスムーズになるとおっしゃっていたが、この点は異文化を持つ未知の相手と交流をする際にとても重要であると感じた。また、青木さんは「食は国際理解の第一歩」とも述べていた。異文化の相手と交流するのはハードルが高いと思いがちであるが、食という人類共通の話題を用いることで異文化交流はより簡単で深いものになるだろう。特に、「相手と異なる部分ではなく、相手との共通点を見つけることが重要」という点が印象的であった。私たちは異文化交流をする際、相手と異なる点ばかりに着目し相手を理解しようとする節があるだろう。しかし、青木さんは今回私たちに、共通点を分かち合うほうがより良い関係を築けるということを教えてくれた。共通点からお互いを理解していくという交流の在り方は異文化交流をしていく中で活用できそうである。

企画担当者による講演者紹介

講演者の青木さん（壇上）